

JHP ネパール支援の歩み

JHP は、カンボジア以外の支援国として、ネパールでの学校建設を継続しています。
今号では、事業を開始してから5年間に渡る、ネパール支援の歩みをご紹介します。

1 棟目：バヌー学校【完成：2013 年 1 月】



旧校舎



2 棟目：ラストリヤビジャヤ学校【完成：2013 年 3 月】



3 棟目：シンガデビ学校【完成：2014 年 9 月】



支援実績は 6 棟 27 教室

JHPが支援した6校の学校には、2015年2月現在、合計で2840人の生徒が勉強をしています。
2015年度は、2月より7棟目の校舎建設を開始しています。

4棟目：ラクスマー学校【完成：1階2013年9月、2階2014年9月】



5棟目：サラソワティ学校【完成：2014年11月】



6棟目：ゴダマラ学校【完成：2014年11月】



1. ネパールの概要



ヒマラヤを背にしたネパールには世界の標高 8000 メートル以上の 14 座のうち 8 座が集中している。国土は日本の 4 割弱、耕作可能地はその 20%、森林が 33%、残りは山岳地帯である。そこに日本の 2 割に相当する 27 百万人が住んでいる。30 以上の民族から構成された多民族国家であり、国民の 81% がヒンズー教徒、仏教徒が 10% 余り。人口増加率は 1.7%。1 人当たり GDP は 735 ドルで世界の国々の中で 164 位、貧困率は 25%、いまだに開発途上の貧しい国である。農業のほかめぼしい産業はなく経済成長率は発展途上国としては低い 4.6%、産業としては農業が 35%、商業がそれに次ぎ工

業は 20% 以下にとどまっている。内陸国であるため輸送を陸路に頼らざるをえず、産業の発展には大きなハンデキャップとなっている。特に石油、鉄鋼を 100% 輸入に依存しているので貿易収支は大幅な赤字である。これを外国への出稼ぎ労働者からの送金で補っている。同時に海外からの ODA 資金への依存度も大きい。日本の経済援助は英国、米国に次ぎ絶えず上位を占めている。

4 世紀ごろから王国になった歴史の古い国であるが、特筆すべきは植民地にならなかったことである。1814 年英国植民地軍との間で武力紛争が起こったが、グルカ兵を先頭にネパール軍は勇敢に戦い、植民地になることを阻止した。

1950 年以来王制の下で国王と政党との間で権力闘争が続いた。1994 年にマオイスト党が武闘闘争を始め内戦状態になったが、2006 年に包括的和平合意が成立し、マオイスト党と政府軍の間で停戦合意が成立した。2008 年に制憲議会選挙が実施され、王制を廃止し、連邦民主共和国となった。しかし新憲法に対する政党間の合意が成立せず、憲法のない状態が続いている。2013 年に第 2 次制憲議会選挙が実施されたが、その後いまだに新憲法は発布されていない。しかし 2006 年の政党間の和平合意以来マオイスト党は武闘をやめ、議会に参加しているので国内の治安は安定しており、観光客の数も戻りつつある。

2. ネパールの教育



識字率はまだ 69.4% にとどまっているが、資源のない貧しい山国であるため、人々は教育に熱心である。初等純就学率は 92%、義務教育である中学卒の 8 年生修了率は 69.4%。ネパールの教育制度は就学前教育（幼稚園）2 年、初等教育（小学校）5 年、中等教育（中学校）3 年、中等中期教育 2 年（高校）、大学 3 年。ひとつの学校の中に幼稚園生から小学生、中学生、高校生がいる。小中高 10 年間では国際標準に 2 年間不足しているため、中等後期教育 2 年間の導入中である。このためこれまで 10 年制であった学校を教室が準備できた学校から徐々に 12 年制に切り替えている。

これにより校舎が必要になっているが、教育予算は先生の給料に使われており、校舎建設は地域の自助努力と外国の ODA や NGO に依存している。

既存の校舎はカンボジアより丈の低い木造校舎。屋根はトタン屋根。そのため夏は暑く雨季には雨音



がうるさく授業に支障がある。電燈のない狭い教室に時には 70 人以上の生徒が詰め込まれている。10 年制から 12 年制への延長により校舎不足は一層深刻になっている。それだけに私たちの支援によって新しい校舎が完成した時の生徒、村の喜びはカンボジアの比ではない。

小国で仕事も少なく、良い仕事に就くチャンスが増える英語教育に熱心である。英語で授業をする私立校の人气が高く、私立校の割合が 2～3 割に達している地域も多い。公立校でも小学校から英語で授業する学校も出てきた。

高校を終了すると全国共通卒業認定試験（SLC）を受ける。受験者の半数しか合格できず、この成績により進学する大学、学部が決まる。SLC の資格を持つか持たないかで給料が倍近く違うほどネパールは学歴重視社会である。

3. ネパール支援の経緯



JHP の発足時の名前「カンボジアのこどもに学校をつくる会」は、1997 年 4 月に名前からカンボジアを削除し、理念として「戦争や災害で教育の機会を奪われた世界の子供たちに、人種、国籍、宗教その他の信条の違いにかかわらず広く教育等の援助を行う」と謳ってきた。しかし現実には、カンボジアの教育普及に深く関与していくなかで、他国への教育支援までは実施するに至っていなかった。

小山内代表は、長年にわたる国際協力の活動の中で、かつて JEN のスタッフであったネパール人のラジーブ氏と親交を繋ぎ、いつかネパールにも学校をつくる構想を描いていた。しかし JHP の実施体制が整わなかったことや、ネパールの政情がマオイストの台頭により不安定であったため長年計画は具体化しなかった。

2009 年度に入り、JHP 内部で支援対象国の具体的協議を開始し、その第一候補として、上述の理由からネパール支援案が浮上した。その後、2010 年 2 月のニーズ調査（吉岡理事）、同年 9 月の小山内代表等視察を経て、社会情勢上も支障がないと判断され、同時にカンボジアと同じく教育施設の改善を要する候補校が多数見つかったことから、理事会として支援を実施することになった。

支援対象地は、ネパール東南部のインド国境に面したジャパ郡（地図の丸部分）とし、当地の社会開発に功績のあるガナシャム記念財団（GMF）と連携する支援体制を整えることができた。

人員体制は、ネパール事業代表のラジーブ氏をコーディネーター役に、12 ページで紹介するスタッフが子どもたちの教育環境改善に奔走している。

これまでの経緯は、別表「JHP ネパール支援の歩み」の通り、調査実施から数えて 6 年目に入る。直近の調査においても、建設ニーズの高い候補校が多数挙がっていることから、日本国内での広報強化も重要課題となっている。

【JHP ネパール支援の主な歩み】

日程	内容
2009 年 4 月以降	団体内で支援対象国の具体的協議開始
2010 年 2 月 24 日～3 月 8 日	ネパールにおける教育支援のニーズ調査（吉岡）
2010 年 9 月 20 日～9 月末	ネパール学校建設の視察（小山内、佐伯、清國） ジャパ郡のバヌー学校とラストリアビジャ学校を支援校とすることを決定
2010 年 10 月 26 日～30 日	ネパール側担当者のカンボジア視察（清國、ラジープ、プラティバ）
2011 年 12 月	バヌー学校、ラストリアビジャ学校着工
2012 年 2 月	建設進捗、モニタリングの為の出張（吉岡）
2012 年 7 月	建設進捗、モニタリングの為の出張（清國）
2013 年 1 月 24 日	バヌー学校贈呈式実施、ラクスミー学校着工（吉岡、清國）
2013 年 2 月	シンガデビ学校着工
2013 年 3 月 25 日	ラストリアビジャ学校贈呈式実施（清國）
2013 年 10 月 25 日	シンガデビ学校の贈呈式実施（吉岡、中込）
2013 年 10 月 27 日	ラクスミー学校の贈呈式実施（吉岡、中込、清國）
2014 年 2 月	ラクスミー学校の 2 階部分の増設着工
2014 年 2 月	サラソワティ学校着工
2014 年 3 月	ゴダマラ学校着工
2014 年 3 月	建設進捗、モニタリングの為の出張（清國）
2014 年 9 月 30 日	ラクスミー学校の 2 階部分の贈呈式（清國）
2014 年 11 月 10 日	サラソワティ学校贈呈式（吉岡、清國）
2014 年 11 月 11 日	ゴダマラ学校贈呈式（吉岡、清國）
2015 年 2 月	ラクスミー・ブラサード・デブコタ学校着工
2015 年 5 月	サラソワティ学校着工（予定）

4. 今後の支援について

2015 年度は、バドラプル市内から車で 1.5 時間、インド国境沿いのラクスミー・ブラサード・デブコタ学校の支援を決定し、2 月より 1 棟 4 教室の校舎建設を開始した。

既存校舎は 6 棟 16 室あり、教室として 14 室、職員室として 1 室、倉庫として 1 室を使用。校舎の状況は、5～6 教室の床が土間、壁に大きな亀裂、木造屋根材の腐食、トタン屋根からの雨漏りなど非常に悪かった。

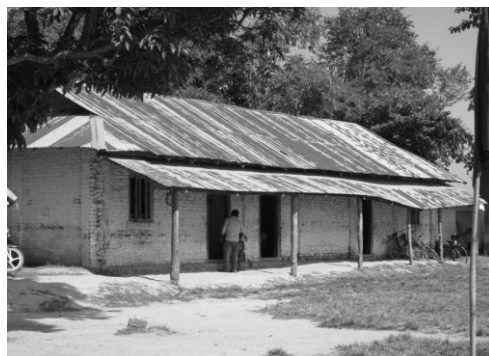
生徒数は、幼稚園～10 年生（日本の高校 1 年生程度）までの 712 名が通学。幼稚園から 6 年生までは全て英語にて授業を行っており、7 年生（日本の中学 1 年生程度）からは、近隣他校（他校は 6 年生までの学校の為）からの編入生も居る為、ネパール語での授業を行っている。父兄や生徒から英語での授業の要望が多い事から、今後は 7 年生以降の全学年においても全て英語での授業に切り替えていく模様。

同校は、英語模試にて同市で常にトップ 3 の成績を収めており、授業のレベルが高い事から、遠方からの入学希望者が多く、特に 6 年生以降は 1 クラス 90 人になってしまう学年もある。

既存校舎は教室サイズが小さく、また机や椅子なども不足していることから、定員オーバーの教室では、全ての生徒を黒板と対峙する形で座らせる事が出来ず、写真のように横向きで授業を受けている。

地域の学校への協力体制も非常に積極的で、学校運営委員会のメンバーが毎日 1 名、ボランティアで学校に滞在し、学校での問題点や授業のモニタリングを行い、月 1 回会議を行い、問題点の改善や、自分たちで出来る範囲の校舎の補修などを行っている。

贈呈後も校舎の利用や管理面で信頼がおけることも支援決定の判断材料となった。建設が順調に進めば、2015 年 11 月にはネパールに新たな校舎が完成する。



現地からのメッセージ



ラクスマー学校は、1965年にメチ氏により寄進された土地に建てられたブリキ屋根で狭い校舎で開校されました。校舎は小さく、幅が狭く、天井の低いブリキ屋根でした。教室は、とくに雨の日は騒音のため、夏はブリキの熱のために、授業は快適ではありませんでした。一般的に、雨や暑さのため、授業は毎年最低で2か月は中断され、生徒の教育成果を悪くしていました。

JHPとGMF（ガナシャム記念財団）は私たちの状況を見極めるために訪問されました。皆さんは、私たちの苦情をすぐに理解し、援助を約束してくれました。結果として、私たちは2階建て8室の支援を受け、学校の状況は一変し、年間を通して中断なしで授業を行えるようになりました。それは、生徒と教員のすべての業績を改善するという結果に至っています。

それゆえ、私たち地域全体と保護者全員は、日本の支援者に対して感謝をお伝えいたします。私たちは、教育と授業の質を高めてくれたこの歴史的な出来事にとっても満足し、興奮しております。故に当校は、ご寄贈くださったご支援者のお二人が永久に記憶されるように“誕生日”をお祝いすることに決めています。（ラクスマー学校 グプタ校長）



以前は、私たちは幅の狭いブリキ屋根で低い天井の校舎で勉強していました。その校舎は、雨季のブリキ屋根の騒音や、夏は屋根から放射される熱によって、中断の無い規則的な授業は受けられませんでした。この状況は、学校の建設により変わりました。今は授業が規則的に行われています。私はいつも劣等感を持っていました。それは、経済的に貧しいために私立校に通うことができなかったからです。しかし、私はもうそう感じることはありません。それは、私も私立校の生徒と同じような環境を得られているからです。だから、私はお二人のご支援を決して忘れません。お二人のご長寿とご健康をお祈りします。そしてJHPとGMFにも感謝いたします。（ラクスマー学校9年生 Ashmita Chaulagainさん）



私はいつも私立校に通うことを夢見ていました。しかし、家族は貧しく両親は私を私立校に通わせることができませんでした。しかし、今、ご支援のお蔭で、私は私立校と同じような学習環境を得ることができました。私は、ご支援者のお二人の寛大さに心から感謝いたします。そして、私も大人になったら同じようなことができればと思っています。校舎を眺めるときにはいつでも、私はお二人のことが思い浮かびます。貧しい家庭に生まれた私たちは、お二人を人間性の英雄としてたたえます。快適な教室で学ぶという私の夢をかなえてくれたJHPとGMFにも心から感謝いたします。（ラクスマー学校9年生 Roshan Koiralaさん）

現地レポート

ネパール国ジャパ郡での学校建設

ラジープ・カナル

ネパール国ジャパ郡における学校建設プログラムは、JHP・学校をつくる会（JHP）とネパールの NGO であるガナシヤム記念財団（GMF）との緊密な連携のもとで 2011 年に開始されました。今日までに、6 つの校舎が建設され、地域住民への引き渡しが完了しました。同様に、1 校が建設の段階であり、今年の 11 月に住民へ贈呈されます。私はこの場を借りて、廣島栄子様、小笠原弘子様、井上孝太郎様、廣田智朗様、廣田初枝様、下崎武子様を初めとするネパール事業の全ての支援者に心から感謝をお伝えいたします。



学校調査で校長先生にヒアリングするラジープ氏（写真右）

支援者の皆さまの寛大なお気持ちにより、今日 3000 人以上の恵まれない環境にあった子どもたちが、安全で快適な学習環境で教育を受ける機会を得ています。これらの子どもたちは、施設が不十分なために屋外でされていた授業に出席するようなことはもはやなく、机・椅子の不足や混みいった教室のために、ただ教室の座席を確保するだけの目的で、朝授業が始まるよりも早く学校に行く必要は無くなります。同様に、子どもたちは、屋根の穴のために、雨季の雨水で濡れるのを心配する必要はもはやありません。それゆえに、これらの学校の生徒、教師、全住民は、全ての支援者の心温まる支援を、これからもずっと記憶に留めていくでしょう。

ネパールの近代教育の歴史は 1853 年にさかのぼります。その年、独裁的な統治者であったラナ家が自身の家族と友人のために最初の学校を設立しました。しかし、その学校は一般人には閉ざされていました。1951 年には、この国には高校がたった 11 校、小学校が 321 校しかありませんでした。1951 年以降、ラナ支配が大衆運動によって打倒されたので、教育は次第に身近なものとなり、ネパール人口に占める割合が増加しました。そして、学校は遠隔地を含めて国中に設立されました。1980 年代には、私立学校は繁栄を続け、とりわけ都市部では、人々をひきつけました。今日、合わせて 34000 以上ある私立学校と公立学校が約 780 万人の生徒を受け入れています。このような成功例にも関わらず、ネパールの教育セクターの開発には、問題や課題が山積しています。教育マネジメント、教育の質、教育へのアクセスは、今なお重大な問題となっています。ジェンダー、民族、居住地、経済レベルに基づく社会的な格差は、教育を開発するための要因をまだ阻害しています。財源不足は常に問題点になっています。設備や人材が不十分であることが主要な関心事でありつづけています。

近年、ネパールには、私立と公立の 2 つの学校システムがあります。私立校は、主にビジネスとして営利的であり、個人的に資金を供給されて運営されており、比較的に良質な教育と基盤に関してより良い状態にあります。これは、比較的に安全で新しい校舎、十分な教室とそれに見合う机・椅子、十分な教材の供給などを意味しています。最近、私立校は増加してきています。全ての親は、自身の子どもを可能な限り私立校に通わせたいと思っています。そうすることで、親たちは地域の中で誇りを感じ、とりわけ遠隔地では、社会的なステータスが上がると思っています。このゆえに、ほとんどすべての公務員、会社員、政治家、地域のリーダーは、子どもたちを私立校に通わせています。学校のレベルや立地によっては、私立校の月謝は 30～40 ドルから 2000 ドル以上まで異なります。裏返せば、私立校通いは、1 日 1 ドル以下しか稼げない全人口の半分以上には手が届きません。言い換えれば、私立校は大多数のネパールの親にとって単なる夢でしかありません。なので、親たちはやむを得ず子どもたちを公立校に通わせています。

公立校は政府が資金を供給していますが、学校に振り分けられた 85% 以上の資金は、教員の給与に使われるので、給与以外の運営や教育活動に充てられる資金は極めて制限されています。それゆえに、すべての公立校は、途方もないほどの財政的なプレッシャーの中で運営されています。教材不足、教室不足、生徒のための机や椅子等の備品不足、校舎修繕や建設のための資金不足は、全ての公立校が共通して訴えています。都市部では、親や個人や組織から時々寄付を受けるため、状況は多少良くなっていま

す。しかし、田舎の学校は、村人の大半が1日2回の食事にしかありつけないほど大変貧しく、学校活動や設備の改善のため寄付金を出す余裕がないので、大変厳しい財政状態の下で運営されています。したがって、不十分なインフラ、教室不足、備品不足のために、多くの学校が青空授業をしている様子や、或いは1.5m程度の長さの机・椅子を6~7人で使っている混みすぎた教室をどこでも見かけることができます。さらに、壁のひび、でこぼこの床、屋根の穴、壊れた窓やドアがある古い校舎が今なおフルに使われており、地震のような自然災害の大きなリスクに何百人という生徒や教員の命をさらしている現実を見ることができます。通常これらの校舎はとっくの昔に完全な補修を済ませていなければなりません。

本質的に、ジャパ郡の公立校は大きなニーズがあるのに極端な財政的圧迫の下で運営されています。政府単独では、これらの学校の基本的な必要事項にさえ対処できません。このような状況で、貧困家庭の恵まれない子どもたちは、同じ社会に住む多くの子どもたちが享受している基礎教育の環境を奪われているのです。貧しい家庭に生まれることが、過ちかもしれません。貧しい子どもたちは、他の子どもたちと平等に扱われ、教育の環境を提供されるべきです。貧しい子どもたちが必要としていることはそれほど高いものではありません。基本的な備品やいくつかの教材がそろった適切な教室が欲しいというだけなのです。

『人生における成功のために、人は環境と機会だけあればよい』という格言があります。歴史を見れば数多くの事例があります。ネパールプロジェクトへのあなたの寛大なご支援は、次の多くのペレやメッシ、ビルゲイツ、マークザッカーバーグ、ジャスティンビーバー、マドンナなどを産まないなんて誰が言えますか？ どうかこの高貴な活動に手を貸してください。あなたでなければ誰？ 今でなければいつ？ あなたの寛大さは長きにわたり記憶されることでしょう。

ネパール支援で活躍する主なメンバー



プラティバ（通訳）



ラジーブ
(メインコーディネーター)



サントス（アドバイザー）



バラット
(コーディネーター)



クルップ（建設専門家）